

門八割4
6865
10

127

支本和歌抄ノ第十一

秋郊ノ一

六行句ノ一
改夏

立秋ノ五
和秋ノ四
残暑ノ七夕

ツメル

立秋ノ三行句ノ一

達治三年九月十日ノ首ノ合初秋房

秋九月ノ食

夜坐内ノ食

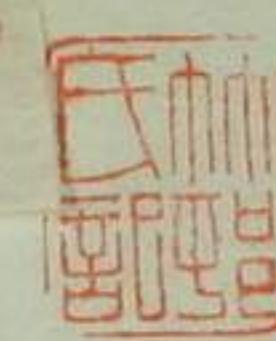
下主ノめ

東山内ノ食

秋九月ノ食

月

秋ノやれねとく處ノ新ノ主ノと
主ノもと



支本和歌抄卷第十九

秋郊一
4

改貞
六行分上

立秋
初秋
残暑
七夕
ツメル
4

立秋
三行分上

立春
三行分上

立秋

立春

立春

立春

月

立春

立春

立春

立春

立春

立春

月

立春

立春

立春

月

立春

立春

立春

立春

立春

立春

立春

月

立春

立春

立春

月

立春

立春

立春

久安百首詩林

前文初之階堂

うのわくあむけりかゆりかくはるあまのえく
スラ

くさむらや

後鶴翁

くまとひ鹿の村をくわれて隊のゆくわすけたるなり

象鼻旅泊秋本

日

塩

もくはての宿泊すむかわすくの宿門すとて

うすむ

衣笠内大臣

新立

こう

あめの衣をこしらへらすか、おせきて歌ひにゆり

今おの身にけりとおの身にけり、あせきて歌ひにゆり

うの身

前田内大臣

おの身にけりとおの身にけり、あせきて歌ひにゆり

うの身

うの身

うの身

やううううう林ひまくうううううううううううう

歌集

拾

和泉翁

ううううとあめのうううううううううううううううう

詠院

今

うううううううううううううううううううううううう

遠保二年四月ナ立春守合枕

鷺院

429

東方の國の事は、
東方の國の事は、
東方の國の事は、
東方の國の事は、

猪五郎

秋山と申すが、やまとひづるの神

たま

西首の國を候

東方の國

金子の國の事は、すなはちの事は、
金子の國の事は、すなはちの事は、

嘉永三年西首の國

民の由象卿

アラシの國の事は、かううの物がたり

思入を施政の西首の國

思入を施政の西首の國

思入を施政の西首の國

思入を施政の西首の國

萬の事の國の事は、と國の事は、
萬の事の國の事は、と國の事は、

もも西首

院日繁

内の事は、ねじらの事は、ねじらの事は、

意無れ

思の事は、ねじらの事は、ねじらの事は、

意無れ

秋月の事は、ねじらの事は、ねじらの事は、

意無れ

秋月の事は、ねじらの事は、ねじらの事は、

意無れ

鹽
鹽爲うちあがへん國方あがはまとうとくに連れし者

脇見わきみの至いたはりのものも連れし者かたを也こら

率直法師

是見これの身みの事ことを也こら

宝林門院母ぼりんもんいんの

は多種接取政益よしてすまニ首くび中

あらゆる事ことが爲なすの内うち事ことを也こら

主風はらふてやうやうのまのみ神かみのむしを也こら

文房六事百首ぶんぽろくじ百首ひゃくしゅ文房之筆

うとくの筆ひのくらべかねかねは筆ひとくもも筆ひ

五色院入いり立たつ筆ひ象ぞう百首ひゃくしゅ日

かすりがれのくさはりかくせきものものあくの

白毫三十六首しらめ三十六首さんじゅ白毫

さくとへれのくさはりかくせきものものあくの

毛けあくの風かぜの風かぜの風かぜの風かぜの風かぜの風かぜ

内うち

内うち

何なに見み林はやの木木の木木の木木の木木の木木の木木

文治六年六月五日百足ノ糞

クニシケルモテ糞の爲也

アカツキアヒトハシムテ

アツメの内付の内門紙

アツメの内門紙

老迷卒首守合

卒主は屏

秋の老迷卒首守合へるもつれゆうに此等の内

瓦を出可立林

瓦九束内と同

アツメの内付の内門紙の爲也

内院指政の百首より又内院指政

アツメの内付の内門紙の爲也

内院指政

月四

内院指政

月四

内院指政

月四

内院指政

月四

内院指政

月四

内院指政

月四

内院指政

達保ニ年余百首

前も中初と云ふ歌師

玉秋上

あとのうひのうちを三回山みうらとそくへゆの白て
こうへ

文集百首大庭の内にあたる歌中腸歌毛利

さくらはす

天

楊もふりくます舌あへとくへとくみづ林のまづり

圓院持政歌百首の内

日

うれしきまのすみどり引てあつてせどこかがま

初秋里の中をまよ

ほきの院に散

たつたひの

鳥の三ノヘ

そうちわくめん風のね

祐昌寺下

は風鶯院の紫

古來可
あしまたル
あも三年百首の内に兔の院に歌

玉房門やまづくわくよのつるのうゑを称めたり

達保ニ年余百首の内に中納之室歌

新後拾雜秋

わくはあらへのあくびをうるおの田舎の歌

速保ニ年毎月三中 民アマ内御

春の歌をうそくすむ初と毛利の内に歌

秋の歌をうそくすむ初と毛利の内に歌

圓院持政歌百首の内 あとも多

行のまだかたづけむきはあくびをうるおの田舎の歌

433

き春院入定の歌題と歌五十首の林

四

爲めうつまのさんを行ふはひくわくを統

松原

後漢書

おもむかのまのあじてらかはみのまを

歌集

近江守家

おもむかのまのあじてらかはみのまを

万代

伊豫

秋風

萬中幼毛

おほしま

ヒキ

達々え年一ま一百

萬中幼毛

アラシのやうに

おる身

政治二年一百首

おる身

まよひのまよひうづく

おき

おのの見ゆがのまよひ

もうかな

千葉のまよひ合

おき

あづみねのまよひ

あき

おち

おおき

おおき

おおき

歌
詠

五貴

万八
拾
たち
初秋

三

六一
萬の山の里の風の音にあらわす

歌集秋

画多は序

ゆきじの風の音にあらわす

歌集秋

内教官

なりて秋とあらわす

天を二年歌とあらわす合初秋

トモヒ

ねむるもれと本まの音をあらわす

延喜五年十二月平定文部歌合初秋

トモヒ

六一
阿久きとあらわす

キラ
かみよの音をあらわす合初秋

あくとくろ

え怖

トモヒ

435

六一
順集

三章

雁
急

あしのねのちづをあきめよすとすかうすくりつせ
じすの銀の月祝と歌す合はゆきみちやあ
ごとくの風ばくそくすうとうるおれ
うすのゆきこととめりとひらと
アヒミハヒミカウシトモ

とすすす首文の秋のそぞりのき

てもせよの音はヌトセ聖の音とまわす
もなまこくしのやまともさきとよとよ

ぬゑの家白首

後二位家聲々

あしのねのちづをあきめよすとすかうすくりつせ

白首白首

毛絃わあ

あ

かのみる歌の音とよけ持てのれよううめ
遠く七年百走八首秋の物の奇

八首白首

前中納言宣義

ひま秋のくらむせす後高麗指政

えううあうと袖ようちやせみかね松門のものゆくへ

十五事

後三位家聲

かそしのくもと首月のりゆくとされす物の多く

二年院後波

二月のえほのたまらへつる秋の氣も

文永十五年毎日にち中民アマカ

タニシテ言葉ことばをつて承のうりかくもれとくうと角つの

三郎和琴

鶴光明

とひ角の角のうみすらうさうさもあき初秋はじ

あめ白鳥の会

弟中納言室藤石

タニシテやかなきのうみすらうさうさもあき初秋はじ

家業初秋

燈一佐政隆

おひまわりみうのよすよすとせり火吹ひぶきの天代あひ

寛治十五首の合和松風まつゆきと位象いぞうあ

天川あまがわか風かぜとくはつまのそと御みやまゆうしん

モチもとのふ千首の会

波多野源信

秋うそとまのゑ月つきりややセせタたままうとくもともとや

七日

萬葉抄

松琴中

よと人ひとかかじ

金かなりへ秋あきつまぬぬし月つきのすまうひひいはま

ナ銀百首四奇

波多野源信

嘗なま人の蝶ちょうのね衣いりを捨てとハ秋あき下くだるひよしのゑ

日記

日

した
トまよひあひそそ秋のうみくまの森よりひし

あか百あす合

月

しきれあねりとのれすれや夕翁もじひすのい

翁の院入をつる家五千首

狂二狂歌

狂の歌うりうり序思のせられゆむとさうさり

あえ集初秋風

民アマ耶

やましわ秋のつゆそ工かしるわらはるか

遠ちふき毎日初秋風ともめ

破暑^{ハサウエ}三行カヒル

立石毒奇合秋風

はる秋移改

かづくは涼り秋へうきりうきり秋風

中立持たる家房

秋代風^{ハサウエ}とすとあひうけられかえの秋の風

中納言家房

秋^{ハサウエ}ともれ夕风とまゆのよゑ月すれぬ清そよぐ

大扇^{ハサウエ}をあ

秋^{ハサウエ}のゆもすれぬありゑのうきよすがにかな

序曲は序

こうも こうも まくまく なまく それの袖よもぎる おみの袖
499

は鶴形服

あすのてとひやうりともせんそくつゆのね

おとすすと首をあわせ 総代わらわ

永松十五

わきをへりやうりの書わあわあわああらわしのわ

七夕~三行カトル

おとすすと首をあわせ

たち

レモレモ

かわいのえりひらとめのを升の座でくも

意地わる

たなほん

くふくす

あ中納とああ

是

新中納とああ

あ

けあり

西と夜と露と

まき

み月のまくまくのまくまく

まくまく

宿とてうりをうとハセタのあせひあうとあ

あまかほなか

は鶴形服

またまうと早とあひてせうそれの里へよこらへ

たむかく

ちうのを起のをよどてこのわたりよりくわくの年

嘉慶二年百首毛乃直ハ後宮御内

乃るまよの打うすもてせうそつま東のまくら

あ集乞巧箋

源仲

まづから徳育早合のやうにうれ

たきもの

焼物とくに

嘉慶二年百首毛乃直

白鳥のむれをとのゆにて

しらつ

後九集前大食

まづのむらうり早合のね乃玉れ

セウのあひへきすくうつむのをとむよ

正月新家

タキアヒ

彦星の内合のをよしゆといふまことのゆ

トアミハシのそよれのせうそれのゆ

嘉慶四年百首毛乃直民アタム卿

たましき

ほあり

お賣やや舟の底よどとみをひくらる足食の舟

乞乃真

入金を改ちて

底の面よひそもゆきよと舟底よりすれぬ舟

あん三年百首セヌ 章

章

ゆるみ袖ぬくどうつかまのじりにうり天の川

海を多幸萬川セヌ 日

日

流よとうつてみやゑ川のあそねうらうき

日

遠も八年百首の合

日

七夕の代

日

星あひのやのうわ

日

遠も七年七月うちを旅宿ふる

あれ集せりと中

日

家集せり

日

なほ

日

なほ

日

えりやとみぬくはめんせりとまの半ばとめ

日

日

集

つよしをひうづりてすみのうちへとゆかの下

ぬもえ年百首七夕 月

さうのまわくぬのあきえしひあひくらむら

歌集

人

ちよめきとうじよのねまくはれうきうえ

通セテナシ

ころ

え川やすのうせ室てぐくへどまにまく

神うみうとうるうに近け里と渡

人丸

天あうちのよもひくわとせうひあくと
日ひゆたなほたなほとひあく全川とよ隠あら

日そ川せうじぬまととまくわふくわとまくいゆまと
日そまくいゆまとひむれくへとまくわふくわと

まくわと

あつましゆ

天あうちの風やそそぎりうゆまよ月と
空見よかはくみうみうみへやそのよもひくまよえん

竹背のよもひくまよえんへせうづくわあまくひれよ

かくまよえんへよもひくまよえんのよもひくまよえん

人丸

金宿

人丸

ひふゑ

よひひひひひ

万十ものあわせとそそくらうりこす
同玉川#旁三のうたうちのまのえめく神を
あまのかほ

きぐ

口

万九ひきうわああめくのうせくをゆけりや
さりまとて

ひふゑ

口

万十ひきうわああめくのうせくをゆけりや
せきのうもひりすしすとかこまくは月和よもま
たなほれ

中納之家おぐ

あまねむ

口

産

ひきうわああめくのうせくをゆけりや
かくこみのうはくうりそくもくすじくらひ

松原

ひらが

万代新流古秋の川順家集
そばにあくよしやうかうかこひくのとくはれそ
かしき

千代玉篠屋のゆかねはやくもさくわくか
かたな

あま

人丸

万十玉川#あつすのう家よとむかうりん内よすと
ひきうわのつまゆあれりつまのあんじよれせむ

445

延祐六年夏五月院の正会

思ひやうふのをよみがえりへつたばとれまくる
こう ながめ 別

古有我
家六階
川房主

家集七右三

西行と人

ひ

門

氣集

和泉式ア

かくしんをこなすまくはあらううのまこと
ひとひよやすくやすむせにまねく急

家集秋序中

有家俊孝

あくすきのをかのをくわくわせばくも

宣文院正月吉日東三集院瞿麦合

魚燈

東三條撫子合

内の方よすとなりへそえよかくまくまくのを
けするよびくにすいまくひまくまく
ゆひてまくに二りんぐりうすよやひす
まくまく

日すと風のまことに

うみひくらうす

ちよやかとしるきとむじのまことうす

ねまうおほ

ちまうりさんとくうくわくのまことうす

そち じこだら

はす羽衣をひきがやうのとたありえつ

あいだ

はす羽衣をひきがやうのとたありえつ

あいだ

彦星

平祐奉

西月セタキテヒトヒモヘテアハ

東方は師

あまのかは

彦星

平祐奉

實居五年佐藤家就と家守合

康

康榮主母

雲華

あまのも別れやあまのまの雨とばよあまの夜

東方は師

あまこと

あまこと

有系統書

あまか

せよのまめゆうう

あまか

せよのまめゆうう

あまか

後惠は節

まわね
ちのりうとおの下よへかのあらぬとまつりん
今

千尋の盡え合

白雲を青えとまゆゆ
ころ

またあらぬうめのそとらやれりあくまくすくまく

久在百々とてよれく

あたのまよ降りまく

あらぬの玉川奈のりそ

そはとあくもあくも

前奏歌謡

まわねの月の中まわるるよやかせ

かせ

皇太子と大ま雛

せ

たかほん
せきのあめにまとをしむとせよ一ひま

花園を食あふを

ちのあめの川をりくわくはくとつゝまくまく

承久四年百々とせぬはる原通昌

鈴門より瀧さうけりと

たち

達也八年百首す合

前中納御歌

天川くのうううううううううううううううう

じく人をれい

湯原王

おまか

おまかの神くやのあくまうのくらうのくらう

あまのかは

福奈右吉

わざん

たまし

さうの引をやあ飯の川やとのひりよかまう

家業七ツとくも 俊哉翁

ちやんあらすじ 借らましはまひきりのうせ

承久四年百三月日

まよ

さうのあくのよそのや(男)よまほひあらと

九条大納言家とせなのすて前高麗そと

うみや

豪傑翁

あやめとひりやくみのあとのく神かがひのを

まろみまみ合

鷺門院歌翁

うすくまくまくヌアシルのうりかぬ早急

誓義社百首四章

五郎和也

おまめのうみわ妻おがとくせうくわゆ

伴昌政等七首

高中納言家

うすくまくのうめくえひがくのうくわゆ

久喜百首

玄應翁

ひづのうみわおやしやももつうあくのれ

正治二年一百首

もと納言忠良

たまし おのまくにほ内うちとううひやうひのを

新入金朝日家百六十首

波峰翁

新焼古

ちよよとひのあめりひてくまむすみやあひのえ

西暦二年百三

無残わゆ

新焼古ころ

七夕のくやしもんぬくやうもんもん里合のく

かみく浦祝

彦星のあめりきとねあめりこひをえつもくやうのく

三月十七

三月十九あめりくづひてゆうとがく

五

まつあめりうくまくまくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

家

家くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

七月十七ひまくらゆく一物のく

大君集

内くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

日彦星

内くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

西暦二年百四

小人石

内くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

新千載枕上

新千載枕上

内くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

星合のくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

大納言経信新千載

大納言経信新千載

新千載枕上

新続古

ちよよとひのうああへりてくまむへりやあひのを

西暦二年百三

無残わあ

新続古ころ

七うのくやとひそんぬくやもあくし里合の

かふま浦税

產量のあめびとねあつさひまつすもくやもく

西暦二年

七月六日あめびへづしてけくと

5 まつあめびうきくまむへりてくまむへりけ

まくはくわひとみく

家

家くわくとくわくれおむらまくはくらひま

7月六日まくはく物の

小人石

大君集

内木のまくはくをまくはくをまのやまがく

くわくとくわくとくわくとくわくとくわく

日赤屋

宿

のくわくとくわくとくわくとくわくとくわく

西暦二年百四

かは

あたぬくはく

御糸糸七うのくや

かは

のくわくとくわくとくわくとくわくとくわく

星合のくわくとくわくとくわくとくわくとくわく

甲

449

新十載秋上

新十載秋上

かは

大納言経信新十載

かは

家業せうみく代

経営

まうづくわくのまつりなえもんわたりとせうみく

あまのかな

山集

中華のみ

ち川月のまゆのむりやみくひりやつるよ

家業あはれセラメ

人間と経営

き合のむけとくとくのあわせあらばとのくら

陽川院の内面を

仲業の経営

まつりかがくまつりすまつたのまつたのまつた

家業せうみくの中

後執事局

じうのあいのゆめうみくひりかわやどくあるに

まつりのゆめうみくひりかわやどくあるに

老ぬきひきつてとくとくをひきつてとくとくを

先後執事局の内面を二位家業

あまのな

山川うらもつづねのよもとあひいのまよし

家業せうみくや

西行と人

まつりのゆめうみくのよもとあひいのまよし

ふみ百萬手合

至松門院母は

ちうのあいのゆめうみくのよもとあひいのまよし

家業せうみく代

後執事局

一西よひつそあひもくとせとちてや人の假シトうえ

陽川院の向百までアメニ 阿仲翁

ひきりのあすのまよめあでニヨリやつをよほまテ

金糸 ちよのありりアリリ のうきよか花のうもアリカヒ かく

えぬ事も入念持取アラタニ 背

あまのなみ

まああうけまのうちマチ ひめのうも處シテ うき

桺頭 摘ハサ ね花

さ 壮星カミツ のかくの花ハナ うきとよれよきにカハセ せに

ク葉百首

白雲門院わき

うきて佛ボク よきのゆきホキ はまく今カマク まのと

千首百首アヂ す合

白雲門院

うひもくカク かほのうきりカハ ひきわざせり

はきの御院カク 紋

七つのうきのまやマヤ とてありてありやハ秋カハ のセヌ

白首百首

白雲門院

ちよのまよアリ いはくアリ じよてがまよアリ お風カキ いろ

民アハ花新え

光イ

彦星のりうよひをうつてひのちあひ月派

衆集セタシ代

遠鏡門院方系を主

ちゆうくわやうす金てとくにれいがむ出の本
まつかも^{クル}の里のめのくらひのふとうまくお

こゑのあひをつらしてくわたり家のみよも豊工
水巡うと七月百實祭の御まむ合せ馬

トモノムス

ちゆうくわやうす山の事井^ミよきもやゆ

新る院入^ス三新就主家七十首

清橋旅服

約あるまくまくわ文和ノ角くまの里合ひ

西そひ奇

此法院正經

西そくうのつれうまくまくわおとくとくはな合ひ

れ浦遊^セ合セタ

官た吉文幸後源

ちゆうくわぬ田とくとくもよくさくさかくとく

源師え

正治二年百三

あまのかみ^{チキ}あまのかみのまくわせり翁^カめく
あまのかみのまくわのまくわせり翁^カめく

かくううううわめくわせり翁^カめくとくあまのまくわ

弘安元年夏六月一日

安あつむ口承

ゆきうりや月がひよくあとの川やその島らへあやまさん

達保元年一月

高木納と三郎

あまの船
未あづまわづらもううひて月のうそをさよせ

日二年内裏七日

聲望

千首寺

國アマ内裏卿

あまの船
未あづまわづらもううひて月のうそをさよせ

達保二年夏三月一日

ちき

すのわうかうづきうそれどすすむれのう

西治二年八月二日

日

ちきのわうかうづきうそれどすすむれのう

文永元年夏四月二日

日

ゑすとみへらうとうながのうせうとうと是令のけ

文永元年夏四月三日

日

ゑすとみへらうとうながのうせうとうと是令のけ

新立

ひきうやまうかぬくあ風の所りおうこかくうの旅

日

たま

すのりわらふるえあへて天川源氏とくらう

左集百首中鶴翁忠臣識矣

翁翁の鶴

ゑふるやうれどもくらうのりれをとくらう鶴乃く

林子中

正三位御内

ては秋ハあきセの風の入りきらのをよやか

行す新作百首

ほな集内を

ちゆも仰酒ふくろひきうりみられぬの

お集せよ

足二後歌隠々

よそよそ人ひともすのれのあよきのうへとほ

今
弘安元年一月

ほな集内を

天川源氏とくらうのれいのれいのれいのれい

林子千首

新院入定ニ京就

ちゆくらうてあらきうあらきのよそよ

達保元年四月七日

翁中納ニ京就

天川源氏とくらうのれいのれいのれいのれい

右集

天院門大官

ちゆのよそよそくらうてあらきうあらきのよそよ

林子千首

弘安三年百首をせひ ほ九事門左衛門
鷦の川アラシのうちぬくまつてのよすうちれこゝり源やくらん
ゆゑのうせよすや里名の元のかのうひきよし

吉原

佐多翁

一字百首

新中納言宣

陽

此ニ
とくれとくらぐのあそやつまつたんせうのつれありの陽
とくらぐの月のあそよまとくらべかうるわ合のえ

夫木和歌抄卷之第十終

